

試される宗教リテラシー

『現代宗教 2024』編集委員会

1995年のオウム真理教事件に続いて、2022年には安倍元首相の殺害事件が起こり、日本は「カルト」被害がはなはだしい国、「カルト」がはびこりやすい国ではないか、と考える人もいる。宗教とは何か、宗教はどのように展開してきたのか、宗教が尊ばれてきたのはなぜか、他方、宗教が多大な人権侵害をもたらすような現象がなぜ起こるのか。もし、国民の間に、こうした事柄についての基礎的な知識があれば、宗教をめぐるこれほどの混乱は生じなかったのではないか、こう想定する人もいる。

こうした問いかけは国民の「宗教リテラシー」に関わるものだが、そもそも宗教リテラシーとはどのようなものか。どのようにすれば宗教リテラシーは養われるのか。また、これまでのところ、人々は宗教に関する情報にどのように接し、学んで来ているのだろうか。

学校教育が宗教リテラシーを養う大事な場であるのではないか。では、現在の日本の学校教育では宗教についてどのように学んでいるだろうか。公立学校ではどうか。私立学校ではどうか。そこにどのような問題があるか。また、世界各国ではどうか。実は世界各国で状況や課題はさまざまなのだが、そのことを踏まえて今後の学校における宗教教育をどのように考えていけばよいのだろうか。

他方、宗教的な家庭環境の下にある人は、子どもの頃から宗教的前提を当たり前のこととして受け入れるように育つこともある。日本では、

お寺に生まれた子弟やキリスト教、新宗教の信徒の子弟はその例だが、昨今、こうした環境で育った人たちは「宗教2世」という言葉でよばれることがある。このような宗教の受け入れ方は、宗教リテラシーとどう関わるのだろうか。

また、メディアが発達してきた現代社会では、人々は家庭や学校だけでなく、インターネット、SNS、コミック、映画、アニメ、ゲームなど、さまざまなルートを通して宗教についての情報にふれ、ときには慣れ親しんでいる。このようにメディアを通して得られる宗教関係の情報は、宗教リテラシーにとってどのような意味をもつのだろうか。

この特集では、以上のような問題をめぐって、これまでさまざまな場で考え、論じてこられた方々をお招きし、宗教リテラシーについてあらためて考え直していきたい。宗教について成熟した眼差しと感性をもって接することができる——このような人々が多い社会とはどのようなものか。そのビジョンを垣間見ることができることを願っている。

(文責：島菌 進)